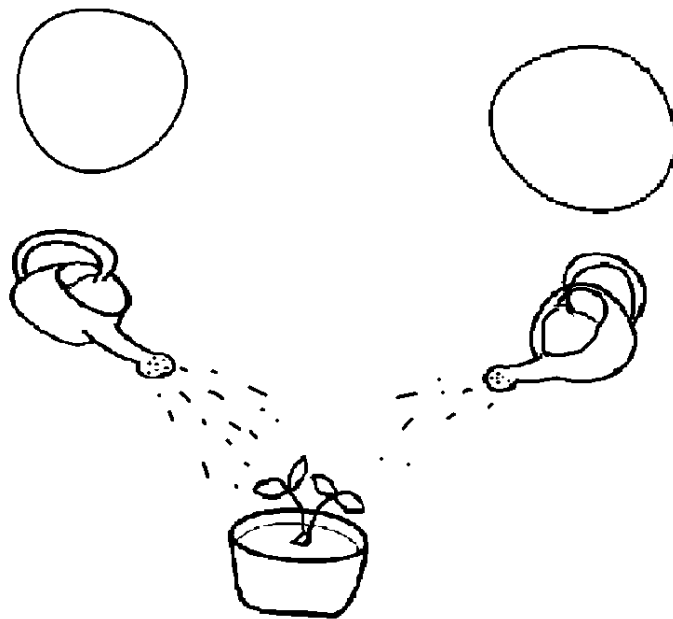


# 自信のある言葉で子育てを

—母語の重要性を親や保育者に伝えるためのパンフレット—



バイリンガル・マルチリンガル子どもネット (BMCN)

広報グループ

バイリンガル・マルチリンガル子どもネット（BMCN：Bilingual Multilingual Child Network）は、日本国内また海外在住の日本語を含む複数言語環境で育つ子ども（BM児）が、グローバル時代に必要なマルチリンガル・バイリンガル人材に育つように、BM児の言語発達全体を支えることを目的とする団体です。

表紙の絵は複数の言語が育つ様子をイメージしています。

太陽は「家族や地域の文化」、じょうろからそそがれる水は「声かけや遊びなどの体験」、そして芽はそれらによって育まれる「こどものことば」です。

# 目次

はじめに	… 2
1. どの言葉で子育てしましょうか	… 3
—家族でルール作りを	
2. 子どもの母語・継承語と日本語	… 4
—国内の外国人児童生徒を例として	
3. 読み聞かせ	… 9
—どうして読み聞かせが大切か	
4. 学校に行くようになったら	…10
体験談:アルゼンチンから来日した家族	…12
おわりに	…16
資料	…17
BM 子ども相談室のご案内	…21

## はじめに

このパンフレットは、親の母語が少数派である社会で子育てを始めた（る）親御さん（例えば、日本で日本語を母語としない親）と、子育てを支える周囲の人たち（保育者、教師、教育支援者など）に、多言語多文化環境で成長する子ども（CLD 児）<sup>1</sup>の言葉の力を育むヒントになればと作成したものです。

まずは、バイリンガル・マルチリンガルに育てるための母語による子育ての可能性について取り上げました。

親の母語が社会で少数派の場合、現地語（日本の場合は日本語）を使って話しかけるべきか、母語を使ってそうするのか迷うのが普通です。子どもの将来を考えて、あるいは保育者や教師の勧めで家庭でも現地語の使用を選ぶ場合もあるかもしれません。でも一度立ち止まり、母語で育てるメリットに思いを馳せてみてください。親が一番自信のある言葉で子育てをすれば、危険を伝え、子どもをたくさんほめることができ、何かを筋道立てて説明でき、ふんだんに話しかけられます。子どもの言葉の力が最も自然に育まれます。

バイリンガル・マルチリンガルに育つ環境にある子どもたちは、親の母語の大地から、他の言葉の力をつける栄養を受けます。母語を通した親子の絆や複数の言葉の力は、子どもの財産になります。

---

<sup>1</sup> CLD 児とは Culturally Linguistically Diverse Children の略称です。

# 1. どの言語で子育てしましょうか

## —家族でルール作りを

両親の母語と現地語が異なるだけでなく、国際結婚の両親の母語が異なる場合もあるでしょう。その場合それぞれが母語で話してみませんか。子どもに関わる家族や周囲の人が何語で話すかルールを決めて、お互いにそのルールを認めあうと良いでしょう。

この表を使って、今の状況を整理したり、ルール作りに役立てたりしてください。

		子どもに使う言葉	夫婦間で使う言葉
家庭の中	父親	語	
	母親	語	
家庭の外	近隣	語	
	保育園・幼稚園 ・学校	語	
	祖父母	語	

## 2. 子どもの母語・継承語と日本語

### —国内の外国人児童生徒を例として

多様な文化的・言語的背景を持つ日本の CLD 児の母語・継承語と日本語(現地語)は、どのように育つのでしょうか。いろいろな状況で結果が変わってきますが、その中で、入国年齢(いつ日本に来たか)、滞在年数(日本に来て何年になるか)、親の出自(親/片親が外国生まれか現地生まれか)にフォーカスして考えてみましょう。まず下の表をご覧ください。

表 世代・入国年齢・親の背景・母語/継承語とバイリンガルのタイプ<sup>2</sup>

世代	1世	1.25世	1.5世	1.75世	2世
入国年齢	13歳以上	6-12歳	0-5歳	現地生まれ	現地生まれ
親/片親の背景	外国生まれ・外国育ち				現地生まれ
母語・継承語	母語	母語が後退・継承語へ移行	継承語		継承語
バイリンガルのタイプ	加算的バイリンガル	加算的バイリンガル、バイカルチュラル	減算的バイリンガル、親の文化資本が高ければバイリンガル・バイカルチュラルに育つ	現地語モノリンガル、バイリンガル教育でバイリンガルに育つ	

まず1世の13歳以上で日本に来た中学生・高校生(1世)ですが、母語が読み書きの力までできるので、それが下支えになって、時間はかかりますが日本語の読み書きもいずれできるようになります。つまり、母語と日本語の両方を使えるバイリンガルになるということです。ただ心情

<sup>2</sup> Cummins, 1991, Rumbaut, 1994 等に基づいて作成したもの。一般的傾向を示しただけもので、親の努力次第で結果は異なります。

面では、出身国の文化が確立しており、自分を殺して異文化の行動パターンに無理に合わせることが多いため、バイカルチュラルになるのは難しいようです。**加算的バイリンガル**というのは、母語の上に現地語が加わって、バイリンガルとして日本の社会に貢献できる有用な人材になる可能性を意味しています。

**6-12歳**で来日した小学生(1.25世)は、外国生まれ、外国育ちの親の日本語力が弱い場合が多く、家庭で母語を使うのが普通です。ですから、家では親の母語である継承語を使いながら、学校では日本語を使って学ぶというバイリンガル環境で育つことになります。そうすると、毎日の学校生活を通して、ことばだけでなく日本人の行動パターン、考え方、モノの感じ方まで日本の文化にどっぷり浸かることになるので、加算的バイリンガル・バイリテラル・バイカルチュラルに育つ可能性があります。つまり相手によってことばの切り替えが瞬時にでき、日本語でも母語でも読み書きができ、しかもその奥にある考え方、感じ方まで理解できる貴重な人材に育つということです。でも、家では親と継承語を使い続けること、継承語の読み書きも学ぶ継承語支援が必要です。国際結婚家庭でも、主導権を持つ片親が外国生まれで継続して母語を家庭で使う場合は、同じ結果が期待できます。

**0-5歳**で入国、あるいは**現地生まれの幼児**(1.5世/1.75世)は、母語が十分育たないうちに国を超えて全く異なった言語を話す環境に移るので、どちらも伸び悩むことがあります。母語で受け皿がしっかりできていないところに、急に日本語のシャワーを託児所や保育園や幼児園で浴びせられるからです。このため、小学校1年で学習に遅

れが出てそれが後を引くことがよくあるので、**就学前・就学初期の1.5世/1.75世は要注意**です。ただ親の文化的資本<sup>3</sup>が高くて、置かれた言語環境を踏まえて親子で努力をすれば、バイリンガル・バイカルチュラルに育つ可能性は十分あります。**減算的バイリンガル**とは、母語と現地語と2つの言語に接触する環境で育つにもかかわらず、結果として引き算になって、現地語のモノリンガルになるということです。

一方、親も子どもも現地生まれの定住**2世児**は、家庭言語が現地語になるので現地語のモノリンガルに育つのが普通です。しかし、もし学校に継承語で教科を学ぶ継承語イマージョンプログラムがあれば、バイリンガル・バイリテラルに育ちます。つまり家庭で使用しない言語も、学校教育を通して育てることが可能だということです。ただバイカルチュラルは育ちません。

以上から、国を超えての移動の中で子育てをする親は、このような一般的な傾向を踏まえて、それぞれの家庭で可能なことを考えて賢いチョイスをすると思います。また、日本社会全体の問題としてCLD児のことを考える場合、**減算的バイリンガルになる危険性がある1.5世/1.75世児への対策が打ち出されれば**、CLD児全体の底上げにつながり、不就学やリミテッド状況の解消にもつながるので、就学準備教育のあり方を考える必要があるでしょう。

(本章のここまでの文責：中島和子)

---

<sup>3</sup> 「親の文化資本が高い」は、ここでは学歴が高く、専門性のある職業につき、言語発達などに関する知識にアクセス可能な文化的、社会的、経済的に恵まれた親、という意味で使っています。



子どもの入国年齢や世代、親の意識や関わりの如何が母語／継承語も現地語の伸びに大きな影響を与えることがわかりました。では、子どもをバイリンガルに育てるには、具体的にどのような関わりをすれば良いのでしょうか。

次頁のイラストは子どもの年齢と母語の形成・維持のポイントを示しています。多言語環境で育つ子どもを親の母語を含むバイリンガルに育てるには、成長に合った母語による関わりが重要であることがわかります。



### 3. 読み聞かせ

#### —どうして読み聞かせが大切か

母語による関わりの具体的な方法として挙げられるのが、本の読み聞かせです（前頁のイラストの「遊び友達時代（4～6歳）」にも母語の本の読み聞かせが勧められています）。読み聞かせは、なぜ大切なのでしょう。

本を読んでいると、親子だけで話すときにはあまり使わない言葉を知ることができます。それは親戚に送る手紙の書き方だったり、お祭りのときに作る料理の名前だったりします。いろいろな場面や人が出てくる話を読んでもらううちに、集中して聞く力や次に何が起こるか考える力が育ちます。また、はじめは聞くだけだった子どもも、親が「これは何だろうね」「おいしそうだね」と話しかけながら読んでいると、「これ、何？」「どうして？」と話に参加するようになります。内容について説明をしたり、親子で話し合いをしたりする機会ができます。子どものときに、このような習慣があると、深く考えて詳しく伝えることができるようになります。母語でそのような言葉を使う力が育ったら、他の言語で勉強するときにも役に立ちます。反対に言うと、母語で言葉を使う力がなかったら、他の言語の使い方を覚えるのに苦労してしまいます。

子どもが成長したら、家族と一緒にいるときとは違う経験をする機会も増えます。そうすると、あるときの経験を母語でどう言うか分からなくなることがあります。子どもの歳に合う本があったら、自分が感じたことと重なる表現や似ている場面を本の中で見つけられます。言葉が経験とつながったら、子どもの中から消えないで、自分のものとして残ってい

きます。

読み聞かせは、文字への興味を持たせることにも役立ちます。読み書きの初歩は強い言語（子どもがより理解できる言語、親が自信を持って使える言語、親の母語）で学ぶ方が効率もよいという研究成果があります。



## 4. 学校に行くようになったら

学校では、授業で使用される言語（第二言語）と親の母語（家庭内の言語）が異なるため、親子ともに不安になると思います。でもこれまでの研究成果から、二つの言葉を学び続けるバイリンガリズムは、言語の発達上、また教育上プラスになることがわかっています。教科学習に使う言語力は、母語がしっかりしていないと習得により多くの時間がかかります（通常は5-7年で習得できますが、母語

の基礎が弱いと10年かかるといわれます)。専門的には「言語相互依存説」といいます。読解力、概念、学習方法、コミュニケーション方法など、母語で養った力を第二言語に生かすことができます。

学習に必要な言語を早く習得してほしい、という願いから、保育園や幼稚園、学校の先生に、家庭でも学校と同じ言語を使うようお願いされたら、このパンフレットをお見せするのも一つの方法です。

**保護者の方へ：**家庭の言語に関するルールを説明して理解してもらい、先生や学校には子どもたちの母語を重視するよう、お願いしましょう。

**保育園や幼稚園、学校の先生方へ：**同僚の先生方とお話する機会に、母語の重要性に関する情報を共有してください。学校で母語を否定されると、子ども自身を否定することになります。



## 体験談：アルゼンチンから来日したご家族

ご参考までに、両親の母語であるスペイン語で子育てを続けた、関西在住のあるご家族の実例を紹介します。

### 【ご家族の紹介】

2006年5月、父親の仕事に帯同してアルゼンチンから来日。来日当時、長男は母国で小学校3年生を修了直後の9歳、長女は5歳だった。翌月、長男は地元の小学校3年生に編入し、長女は幼稚園へ通い始めた。母と長男は渡日前に日本留学経験のある日系人から日本語を少し学び、ひらがなは習得してきたが、日本語会話力はほぼゼロレベルであった。

### 【母親へのインタビュー（英語）】

来日前、専門家に相談し、子ども達の学習についてのアドバイスを受けました。長男は小学校3年生を修了したばかりで、長女は幼稚園生だったので、本国から小学校4年生と1年生の算数、理科、国語（スペイン語）のドリルを持ってきました。長女はまだ母語での文字習得もしていませんでしたので、スペイン語のかきかたドリルも持ってきました。

子ども達がスペイン語を忘れないよう、家の中では徹底してスペイン語を話すことにしました。特に5歳で来日した長女へは本の読みきかせもしました。小学校へ入り、勉強が忙しくなるにつれて、回数は減っていきましたが、3

年生ぐらいまでは断続的に続けました。スペイン語の文字は小学校1年生の9月から教えました。

学校の先生から家でも日本語を使ったほうが良いと言われたこともありましたが、日本人の友だちを家に連れてきた時でも、友だちとは日本語で、親にはスペイン語で話すようにさせました。

子ども達が日本の生活に馴染むにつれ、家庭内での発話が少なくなってきた時期がありました。このままではスペイン語を話さなくなってしまうと思い、嫌がられても、繰り返し言葉かけをしました。ある時、日本語できょうだいゲンカが始まったので「ケンカをするならスペイン語でなさい!」と叱りました。

来日から13年が経ちましたが、家族間では常にスペイン語を使い、長男と長女ふたりの会話もスペイン語です。子ども達は家の外でも躊躇なくスペイン語で話します。

長男は小学校から大学まで日本の教育を受けています。長女は小学校で日本の教育を受け、中学校から英語で米国式教育を受け、今年5月に高校を卒業しました。進路を決める際、高校の先生からは米国の大学へ進学することを勧められましたが、長女は日本での進学を強く希望し、9月から英語で授業が受けられる日本の大学へ進学することになりました。子ども達はアルゼンチンにいる祖父母や親戚と不自由なくスペイン語で交流することができます。

【長男へ文書による質問（日本語）】

Q. あなたにとってスペイン語はどんな存在ですか。また、もしスペイン語が話せなくなっていたら、どうなっていたと思いますか。

A. スペイン語は、自分の文化であると思う。長く日本に住んで、日本の文化も言語もネイティブと同じように理解して生きることができているのは確かだけど、自分の故郷はアルゼンチンで、自分の家族も、そして自分の DNA もアルゼンチンであると思っている。

だから、スペイン語が話せなくなっていたら、今頃、家族やアルゼンチンに居る親戚と今まで通り深い仲を保ち続けることもできなかつただろうし、スペイン語を話すことのできる友だちを新しく作ることもできなくなっていたと思う。さらに言語と文化は繋がっているもので、スペイン語が話せなかったら、自分の中のアルゼンチン文化もなくしているだろうし、さらに、物事に対する考え方や多様性も今みたいにはないのではないかなと思っている。

言語が消えるとその文化は消えると言われてるけど、人でも同じことで、言語が話せなくなるとその文化と繋げてくれる橋が消えるのではないかと自分は思っている。

大人になった今、小さい頃にどれだけ多くのことを親がしてくれたかがわかり、感謝しかない！

【長女へのインタビュー（日本語）】

Q. あなたにとって英語、日本語、スペイン語はどんな存在ですか？

A. 場面によって浮かんでくる言語が違って、どれがいちば



んという言語はないけれど、英語は語彙、日本語は漢字、スペイン語はスペリングというようにそれぞれに弱点がある。

Q. 幼稚園に入ったときは日本語がまったくわからなかったけれど、いつ頃から日本語がわかるという意識がありましたか？

A. 小学校に入った頃からわかるようになってきたかな。

Q. 日本語を覚えていく時にスペイン語は役に立ちましたか？

A. それはあったと思う。例えば、ひらがなを習っていて、アヒルの絵をみて先生が「あひる」と言ったら、これは日本語で「あひる」というんだなあとわかった。

Q. 日本語が上達していくと同時にスペイン語が出てこないと感じたことはありましたか？

A. それはあった。小学校3年生ぐらいの時。

Q. あなたにとってスペイン語ってどんな存在？

A. 家族や親戚とのコミュニケーションに必要なもの。

Q. 自分のアイデンティティーについてどう考えていますか？

A. アルゼンチンに住んでいるおじいちゃんには「もうすっかり日本人だね」と言われるけど、自分では「ぜんぜん違うし」と思っている。私自身は「なにじん」という意識はあまりなくて、私は私って感じかなあ。アルゼンチンで生まれたけど、ずっと日本に住んでるから、食べ物とか、住むんだったらやっぱり日本がいい。

Q. 将来は何がしたいですか？

A. 自分の持っている言語力を活かして、架け橋になるような仕事がしたい。

このご家族の体験から、母語による子育てが、家族にも、子どもたちにも大きなプラスとなっていることがわかります。

## おわりに

このパンフレットでは、親の母語が社会の少数派である場合の子育てについて考えました。母語による子育てに大きなプラスがあることをご理解いただけたでしょうか。

親がホスト社会で生活していくために「現地語」を学ぶことは必要です。しかし、子育ては、親がいちばん自信を持てる母語であることが大切です。なぜなら、子どもは生まれた時からたくさんのお話を親とのコミュニケーションから学び、学校へ行く準備をしているからです。

子どもの成長にともない子育てに関わる人も増えていき、直面する悩みも多様になるかと思えます。

今後は教育関係者に向けたものや、言葉の成長に不安が生じた場合の対処法などに関するパンフレットも作成する予定です。

※このパンフレットの作成にあたって参考にした資料

- ・愛知 外国につながる子どもの母語支援プロジェクト  
<http://www7b.biglobe.ne.jp/~akp/sassi.html>
- ・NPO 法人みらい『こどものことば どうする』（2016年）  
<https://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/237736.pdf>
- ・桶谷仁美編著『家庭でバイリンガルを育てる－0歳からのバイリンガル教育』（2007年、明石書店）
- ・海外子女教育振興財団教育相談事業チーム（編）『母語の大切さをご存知ですか－海外での日本語の保持と発達』（2018年、海外子女教育振興財団）  
<https://www.joes.or.jp/cms/joes/pdf/kojin/bogo-pam.pdf>
- ・カミンズ、ジム、マルセル・ダネシ『新装版 カナダの継承語教育－多文化・多言語主義をめざして』中島和子・高垣俊之（翻訳）（2020年、明石書店）
- ・関西母語支援研究会「多文化な子どもの学び」  
<https://education-motherlanguage.weebly.com/>
- ・近藤ブラウン妃美・坂本 光代・西川 朋美（編著）『親と子をつなぐ継承語教育－日本・外国にルーツを持つ子ども』（2019年、くろしお出版）
- ・櫻井千穂『外国にルーツをもつ子どものバイリンガル読書力』（2018年、大阪大学出版会）
- ・上智大学短期大学部サービスラーニングセンター『日本で子育てをする外国人の方へ』（2012年）
- ・中島和子『完全改訂版 バイリンガル教育の方法』（2016年、アルク）
- ・中島和子「子どもの母文化を尊重し母語を伸ばすことの重要性」小島祥美（編著）『Q&Aでわかる外国人の子どもの就学支援』（2020(発刊予定)、明石書店）

- ・ 西方郁子『子育てのことはー児童館からみえたこと』（試用版 2）（2018年、ピナット～外国人支援ともだちネット内ママ友カフェ）
- ・ 日本語サポートひまわり会、真嶋潤子監修『子どもをバイリンガルに育てる！！ー外国から来て日本で子育て中の保護者の方へ』（2014年、ベトナム語、中国語、スペイン語版、それぞれ日本語併記）
- ・ 野津隆志「母語教育の研究動向 「なぜ母語教育は必要か」についての主張や理論の整理」  
<http://education-motherlanguage.weebly.com/uploads/1/0/6/9/10693844/research.pdf>
- ・ 真嶋潤子(編著)『母語をなくさない日本語教育は可能かー一定住二世児の二言語能力』（2019年、大阪大学出版会）
- ・ 松田陽子・野津隆志・落合知子(編集)『多文化児童の未来をひらくー国内外の母語教育支援の現場から（2017年、学術研究出版）
- ・ 文部科学省『外国人児童生徒受入れの手引き（改訂版）（2019年、明石書店）
- ・ Cummins, J. 1991. The development of bilingual proficiency from home to school: A longitudinal study of Portuguese-speaking children. *Journal of Education*, 173(2), 85-98.
- ・ Rumbaut, R.G. 1994. The crucible within: Ethnic identity, self-esteem, and segmented assimilation among children of immigrants. *International Migration Review*, 28, 748-794.

※下記のサイトもご覧になってみてください。

- ・ “Reach Out and Read”

<https://reachoutandread.org/what-we-do/resources-2/>

読み聞かせが子どもの脳の発達や質の高い言語習得を促し、親子の絆を深めることを小児科医らが中心となり紹介している米国の団体のHPです。保護者向けのページ(<https://reachoutandread.org/what-we-do/resources-2/>)では、読み聞かせすると、子どもがどのような反応を示すのか、親はどのように読み聞かせをしたら良いのか、どんな本を選ぶべきかなどを月年齢ごとに示した一覧表(Milestones of Early Literacy Development)が英語とスペイン語でダウンロードできます。また、小児科医が母語での読み聞かせが第二言語習得にも大いに役立つことを母親に説明しているビデオ(<https://youtu.be/pRYleCOCnhA>)も公開しています。

- ・ “多言語絵本の会 RAINBOW”

<https://www.rainbow-ehon.com/>

「多言語絵本の会 RAINBOW」は、「日本で暮らす外国につながる子どもたちが自分のルーツの国の言語や文化に触れる機会を作りたい」という思いで、東京に拠点に一冊の絵本を様々な外国語に翻訳・録音してネットで公開したり、図書館や学校に出向いて読み聞かせ活動をしたりしているグループです。現在130を越える作品が約20の言語に訳され、ネットで公開されています。それぞれの「ことば」が大切にされることがグループの願いです。

- ・ ハーモニカ

<http://harmonica-cld.com/jp>

CLD 児の言語育成をめざして情報を提供するためのウェブサイトです。子どもや生徒、保護者、先生、支援者、研究者、行政関係者のそれぞれの立場の人にとって役に立つウェブサイトを集めました。多言語のハーモニーが子どもたちを楽しませてくれるように、という願いをこめました。

## BM 子ども相談室のご案内：

BMCNでは、多言語環境における子どものことばの発達と成長に関する相談室を設けています。お困りのことがありましたら、下記サイトにあるフォームでご相談ください。

<https://www.bmcn-net.com/hotline>

自信のある言葉で子育てを  
—母語の重要性を親や保育者に伝えるためのパンフレット—

---

発行：バイリンガル・マルチリンガル子どもネット広報グループ

発行年月日：2020年9月12日

住所：バイリンガル・マルチリンガル子どもネット事務局

〒180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町1-4-13

連絡先：[bmkodomonet@gmail.com](mailto:bmkodomonet@gmail.com)

ウェブサイト：<https://www.bmcn-net.com/>

---

このパンフレットの無断転載を禁じます。ご利用にあたり事務局にご一報いただくと幸いです。